

# 石川啄木の短歌における家族\*

## 一妻節子を中心に一

尹在石\*\*

(e-mail : jsyun@hanbat.ac.kr)

---

### 目次

---

- 一、はじめに
  - 二、妻堀合節子について
  - 三、短歌における妻節子
  - 四、終りに
- 

### 一、はじめに

日本近代文学者の中で伝記研究が盛んに行なわれた人を取り上げるとすれば石川啄木もその中に入るだろう。実際、日本で刊行される啄木関連の書物の多くのものが伝記的なものである。そこには岩城之徳の影響があったと思われる。岩城之徳は伝記研究という視角で、啄木の小学校の成績や啄木が泊っていた旅館の名前のようなところまで詳細かつ正確に調べている。こういった膨大な伝記的資料によって啄木の家族史は詳しく知られている。

啄木の家族史は啄木文学や詩人啄木を語る際、有効に機能しているようである。例えば、父一禎は啄木の短歌的感性に事大な影響を及ぼしたとか、母工藤カツと妻節子との確執は節子の家出事件の原因となり、この事件をきっかけに啄木の文学観や思想観は大きく変わったとかのように。啄木と纏わる人々と啄木の作品との関連性については大体研究されているようである。特に、家族構成員の場合はそうだ。

---

\* この論文は2007年度Hanbat大学校校内学術研究費の支援によるものである。

\*\* Hanbat大学校教授、日本近現代文学

ところで、啄木や啄木の作品を論じた先行論を見ると、啄木の家族は啄木や啄木の文学を支える存在として働いている。啄木の立場を陽のイメージにする役割のようである。

しかし、啄木や彼の作品を見ると、啄木の家族は啄木や啄木の文学のために犠牲を強いられる存在であったのかも知れない。とりわけ、妻節子はそうであったといえよう。こういった家族の支えに対する認識は啄木や啄木の作品にあまり入っていないように思われる。

本稿では、犠牲を強いられる存在としての家族、特に妻節子の視線で啄木の短歌に触れてみたい。

## 二、妻堀合節子について

先ず、伝記的事実をもとに妻堀合節子について触れてみよう。わかりやすく、年譜形式にまとめた。

明治一九年十月十四日～大正二年五月五日。

岩手県南岩手郡上田村に、官吏堀合忠操とトキの長女として生まれる。節子は節操ある厳しい父と賢明で穏和な優しい母に育まれた。

明治二十五年、盛岡第一尋常小学校入学、二十九年盛岡高等小学校、三十二年ミッションスクール私立盛岡女学校に進学。作歌にかなりの評価を得、啄木の音楽趣味をも育成した節子の芸術的才能は、当時の女性としては恵まれた教育環境に依るところが大きい。

一級上で高等小学校から盛岡中学校に進んだ啄木(十四才)と明治三十二年頃相知り恋愛。

明治三十五年(十七歳)盛岡中学五年、退学願を提出し、文学をもって身を立てるといふ美名のもとに上京した。行き詰まった東京暮らしから、健康を損ない帰郷。こういった時期に節子は啄木の力になる。

明治三十七年、周囲の反対に屈せず、啄木と婚約。同年、節子は滝沢村篠木尋常高等小学校の裁縫代用教員を約一年勤める。

明治三十八年、詩集刊行のため上京中の啄木は父の失職(宝徳寺住職罷免)を知り生活設計に苦悩し、結婚式にも欠席した。啄木の不実を指弾する人々に節子は「愛の永遠性なると言ふ事を信じ」と書簡で答え、毅然的に臨む自我の強さを示した。

まもなく帰った啄木との新婚生活は、団欒のロマン的の日々と言うべく、節子の机上には「数冊の詩集、音楽の友、明星、秘蔵のヴァイオリン」(「閑天地」)が置かれ、節子作品二十首を載せる『小天地』も刊行された。しかし、無職生活の破綻で節子は質屋通

い、借金、内職など厳しい現実に直面する。

明治三十九年、渋民の間借暮らしの中で長女京子誕生。

明治四十年、一家離散し、母子は盛岡の実家に戻る。啄木は北海道に渡る。啄木は函館に一家を迎えるが、札幌、小樽へと転職、明治四十一年釧路へ単身赴任するが、やがて職を捨て、家族を友人に託し、単身上京する。この間、節子は姑カツや娘と小樽、函館で送金を欠く極貧の生活を強いられ、函館区立宝小学校代用教員の薄給で辛くも家計を支えた。

明治四十二年六月、啄木は北海道の家族を迎え、一家を成すが、節子は長い苦勞で心身衰弱し、姑との確執も嵩じて九月に娘を連れて実家に去る。啄木の愛や才能をなお信ずる節子は三週後戻ってくるが、この出来事は啄木の思想や文学を大きく変えた。

明治四十三年、長男生まれるがまもなく死亡、産後は不調で明治四十四年結核発病。これは結婚後、啄木の母から感染したらしい。同年、啄木が函館に移住する妻の実家と妻帰省をめぐり絶縁し、また妻への手紙をめぐる確執で経済的な援助者の宮崎郁雨と義絶する不幸な事件が生じた。

明治四十五年、啄木肺結核と判明、三月母結核で死亡、四月啄木も結核で永眠。妊娠八ヶ月の節子は義妹光子や宣教師サンダーの仲介で宣教医コルバンの庇護を受け、六歳の京子を伴い、房州北条で結核療養し、次女房江を生んだ。まもなく、函館の実家の近辺に借家し、啄木の友人土岐哀果や実家の援助を頼りに母子三人で暮した。翌年、大正二年病勢が悪化し、守り続けた啄木日記や遺稿の後事を託し、市内の病院で二十八歳の生涯を閉じた。

### 三、短歌における妻節子

啄木の短歌に妻節子はどのように歌われているのであろうか。分析の対象にした短歌は、啄木の名を世に知らせたと思われる歌集『一握の砂』と『悲しき玩具』所収のものである。この二つの歌集所収の短歌から妻節子を詠んだと思われるものを選んでみた。これらの短歌の選別の際、解釈の基準にしたのは岩城之徳（以後、岩城）『啄木歌集全歌評釈』<sup>1)</sup>である。並べてみると次のとおりである。<sup>2)</sup>

『一握の砂』（数字は歌集における短歌の順番、○は便宜上筆者がつけた。）

○砂山の砂に腹這ひ初恋のいたみを遠くおもひ出づる日(6)

1) 筑摩書房、1985。

2) これらの短歌はもともと三行書きであるが、便宜上一行にした。

- 友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ(128)
- 己が名をほのかに呼びて涙せし十四の春にかへる術なし(153)
- 先んじて恋のあまさとかなしさを知りし我なり先んじて老ゆ(188)
- わが妻のむかしの願ひ音楽のことにかかりき今はうたはず(195)
- わが恋をはじめて友にうち明けし夜のことなど思ひ出づる日(197)
- わがあとを追ひ来て知れる人もなき辺土に住みし母と妻かな(308)
- 子を負ひて雪の吹き入る停車場にわれ見送りし妻の眉かな(361)

## 『悲しき玩具』

- 本を買ひたし、本を買ひたしと、あてつけのつもりではなけれど、妻に言ひてみる。(6)
- 旅を思ふ夫の心！叱り、泣く、妻子の心！朝の食卓！(7)
- 八年前の今のわが妻の手紙の束！何処に蔵ひしかと気にかかるかな。(76)
- 病院に来て、妻や子をいつくしむまことの我にかへりけるかな。(107)
- 子を叱る、あはれ、この心よ。熱高き日の癖とのみ妻よ、思ふな。(127)
- 友も、妻も、かなしと思ふらし一病みでも猶、革命のこと口に絶たねば。(146)
- 放たれし女のごとく、わが妻の振舞ふ日なり。タリヤを見入る。(170)

以上の短歌に描かれている妻節子について考えてみたい。

## (一) 中学時代の回想

砂山の砂に腹這ひ  
初恋の  
いたみを遠くおもひ出づる日

初恋の対象は前述の堀合節子で、啄木十四才の時である。「『いたみ』は表現上は過去の痛みであるが、実際は現在の心の痛みを重ね合わせている」<sup>3)</sup>といえよう。啄木は作歌当時、文学上生活上失敗者としてどん底に陥っていたが、そういった時の「心の痛み」であり、その「痛み」を慰めるものが過去への回想、特に初恋の回想であったと思われる。そういった慰めの初恋を可能にしたのが節子であろう。

己が名をほのかに呼びて  
涙せし  
十四の春にかへる術なし

3) 注釈今井泰子『日本近代文学大系23 石川啄木集』、角川書店、昭和44、p.58。

啄木における「十四の春」は明治三十二年のことである。この年の出来事といえば、盛岡中学校二年に進級したことである。しかし、啄木にはこれより「十四の春」の初恋が思い出されたのであろう。前歌と同じく、失敗者としてどん底に落ちいていた啄木は「いたみ」のなかった、かえって「恋」という幸せを味わっていた「十四」の時を回想するが、「十四」才の過去へかえる方法がないことを嘆いているのであろう。

先んじて恋のあまさと  
かなしさを知りし我なり  
先んじて老ゆ

啄木は友人の小笠原謙吉宛の書簡（明治三十九年一月十八日）に「早く十四歳の頃より続けられし小生と節子との恋愛は、」と書いているように、彼の恋が人より早かったことを認識している。人より早かった恋から来る「あまさ」や「かなしさ」を啄木は体験したのであろう。そして二十歳の明治三十八年五月に堀合節子と結婚するのであるが、そうした早熟な恋愛と結婚は、生活に疲れて二十代で早くも老いを感じるさびしい心情に立ち至ったことをこの一首は物語っている。<sup>4)</sup>

恋の「かなしさ」や人より「先んじて老」いを感じた啄木であったとすれば、その恋の相手の妻節子の「かなしさ」や疲れはどういったものであったのであろうか。これは啄木の自己中心的な視線が窺われる歌であるといえよう。

わが恋を  
はじめて友にうち明けし夜のことなど  
思ひ出づる日

啄木は「わが恋」について後輩の佐藤善助に最初打ち明けたようである。次の文は佐藤が「啄木とふるさと」という題で『岩手日報』に掲載したものである。

石川君に始めて恋を打ち明けられたのは、二人で瀬川深君に遊びに行つた帰り、石川君の家によつた時だつた。一中略一節子婦人から送つた半紙五六枚にかいた恋手紙を見せられたこの時には、単純な愛ではなくてもつと深い肉に根ざした恋の花は真紅に二人の胸にさきくうてゐた。石川君は若い女性を完全に握つたと云ふ喜びと誇りで目をかがやかして居た。

「若い女性を完全に握つたと云ふ喜びと誇りで目をかがやかして居た。」とあるように、

4) 岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』、筑摩書房、1985、p.106。

啄木は恋愛当時の「喜びと誇り」を懐かしんでいるのであろう。

ここで注意しなければならないのは、啄木の視線は後に妻となった節子との恋の甘美な思い出を懐かしむところにあるのではなく、「若い女性を完全に握つた」という「喜びと誇り」の気持を「思ひ」出しているところにあるのではないか。

つまり、その恋愛の対象の節子は啄木の恋の短歌の主人公ではなくその恋を回想させる脇役にしか過ぎなかったのであると思われる。啄木は「痛み」のある現在の苦痛から逃れるための過去連想の対象として恋を回想していると思われる。

## (二) 北海道漂泊の回想

わがあとを追ひ来て  
 知れる人もなき  
 辺土に住みし母と妻かな

この歌は「啄木の後を追って函館に来た母や妻の漂泊の悲しみを歌ったもの」<sup>5)</sup>であろう。啄木は、一九〇七年（明治四十）五月四日故郷渋民を出て、翌日北海道函館に着いた。次は当時の様子が窺われる啄木の日記である。

これこの美しき故郷と永久の別れにはあらかとの念は、轟々と予が心を捲いて、静けく長閑けき駅の春、日は暖かけれど、予は骨の底のいと寒きを覚えたり。（日記、一九〇七年五月四日）

啄木は一家離散という悲しみに身を嘔まれながら妹と共に新しい生活を求めて北海道へ渡ったのである。それから、「啄木のあとを追って」妻節子は明治四十年七月七日、母カツは八月四日函館に到着している。

しかし、八月二十五日函館の大火のため、啄木は函館を去り、札幌へ、また小樽に移った。小樽日報の創業に参加した啄木は三面主任になるなど活躍するが『小樽日報』の事務長との確執により退社、生活に困窮したのである。啄木は妻節子の「辺土」での漂泊の悲しみを歌っているが、啄木の自負心高き行動の結果はすぐ現実に現れたのである。啄木は失職のまま、新年を迎えるしかなかった。

来らずでもよかるべき大晦日は遂に来れり。多事を極めたる丁未の年は茲に尽きむとす。然も惨憺たる苦心のうちに尽きむとす。此処北海の浜、雪深く風寒し。何が故に此処迄さすらひ来し。

5) 岩城之徳、前掲書、p.167~168

一中略一 夜となれり。遂に大晦日の夜となれり。妻は唯一筋残れる帯を典じて一円五十銭を得來れり。母と子の衣二三点を以て三円を借りる。之を少しづつ頒ちて掛取りを帰すなり。さながら犬の子を集めてパンをやるに似たり。一以下省略一（日記、一九〇七年、大晦日）

こういった困窮の一番手の被害者は妻節子であったのであろう。

子を負ひて  
雪の吹き入る停車場に  
われ見送りし妻の眉かな

啄木は釧路新聞社勤務が決定され、単身赴任で、「明治四十一年一月十九日小樽駅を出発」した。岩城は「その日の日記に釧路赴任の心境を『予は何となく小樽を去りたくない様な心地になつた。小樽を去りたくないのではない、家庭を離れたくないのだ。』と書いている。この一首はそうした複雑な啄木の心境に、頼りとする夫が遠い任地に去りゆく心細い妻の気持をあわせて『われ見送りし妻の眉かな』と表現した」<sup>6)</sup>のであると解いている。

しかし一方、「啄木の自負心高き行動」つまり、事務長との確執がなかったとすれば、単身赴任で釧路へ渡ることにはなかったのかも知れない。

以上の二首は妻節子を主人公にして北海道漂泊の悲しみを詠んでいるが、実際、その漂泊の悲しみの「痛み」をもっとも諸に受けたのは妻節子であったのである。

### (三) 貧困の東京暮らし

わが妻のむかしの願ひ  
音楽のことにかかりき  
今はうたはず

この歌について岩城は「妻節子の青春と現在の境遇（本郷弓町時代の苦しい生活）を比較したもので、結句の『今はうたはず』には生活に疲れた妻に対する作者の憐憫といったわががこめられている。また、『むかし』と『今』の歳月のへだたりの中に、啄木の立志の夢が消え、同時に妻の夢も消えたことを示している。」<sup>7)</sup>と解いている。

前述の節子の伝記で触れたが、明治三十八年新婚当時の節子の机上には「数冊の詩集、音楽の友、明星、秘蔵のヴァイオリン」（「閑天地」）が置かれていたのである。

6)岩城之徳、前掲書、p.196。

7)上掲書、p.110。

岩城の解釈のように、啄木は「消えた」「妻の夢」を、「生活に疲れた」妻を憐憫といたわりを持って悲しんでいたのであろうか。

同じ時期に歌われる次の歌を見る限り、それは懐疑的であろう。

本を買ひたし、本を買ひたしと、  
あてつけのつもりではなけれど  
妻に言ひてみる

岩城は「苦しい生活の中で本を買うのも思うにまかせぬ貧しい知識人の嘆きを歌ったもの。」「作者は『あてつけのつもりではなけれど、』と歌いながら、結局あてつけになっているところにこの一首の悲しい矛盾と妻への甘えがある。」<sup>8)</sup>と解いている。

この歌には、岩城の指摘のように本が買えない「貧しい知識人の嘆きや「妻への甘え」はあっても、その買いたい本を買ってやれない「妻」の気持や悲しみは少しも認識されていないようである。

旅を思ふ夫の心！  
叱り、泣く、妻子の心！  
朝の食卓！

岩城は「貧しさゆえにくりかえされる家族のいらだち。そうした暗い家庭を逃げられて旅に出ることを願う作者のくさくさした気持が端的に歌われている。」<sup>9)</sup>と解いている。岩城の解釈のように、この歌には確かに「貧しさゆえにくりかえされる家族のいらだち」から「にげ」たい憂鬱な啄木の気持が歌われているが、そういった夫に逃げられる妻節子の立場は啄木の視線に少しも入っていないのではないか。そもそも、啄木は「家庭」を成す結婚や夫婦制度について懐疑の念を持っていた。

結婚といふこと、女にとって生活の方法たる意味がある。一人の女が男に身をまかして、そして生活することを結婚といふのだ。世のなかではこれを何とも思はぬ。あたり前な事としてゐる。否、必ずあらねばならぬこととしてゐる。然るに、彼等に対しては非常な侮蔑と汚辱の念を有つてゐる。

少し変だ。彼等も亦畢竟同じ事をしてゐるのだ。唯違ふのは普通の女は一人の男を択んでその身をまかせ、彼等は誰と限らず男全体を合手に身をまかせて生活してゐるだけだ。

(日記、明治四十一年八月二十二日)

8) 岩城之徳、前掲書、p.296。

9) 上掲書、p.296。

現在の夫婦制度―すべての社会制度は間違いだらけだ。子はなぜ親や妻や子のために束縛されねばならぬか？親や妻や子はなぜ子の犠牲とならねばならぬか？しかしそれは子が親や節子や京子を愛してる事実とはおのずから別問題だ。 「ローマ字日記」  
(明治四二年四月十五日)

「結婚」や「夫婦制度」に対する啄木の懐疑的な認識について、中山和子は「近代の家父長的『家』制度の結果」<sup>10)</sup>から生じた問題であると解いている。

実際、明治近代の家父長的家制度での女性は「結婚」「夫婦制度」という桎梏に閉じ込められ、身動きがとれないぐらいの苦痛を余儀なくされていたのである。啄木の妻節子も例外ではなかったはずである。しかも、節子の夫啄木は定職のない貧乏詩人であった。

「叱り、泣く」「朝の食卓」を前にした家庭を後ろにして、そこから逃げたい啄木であるからこそ、節子の悲しさは増すのであろう。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ  
花を買ひ来て  
妻としたしむ

この歌について岩城は次のように解釈している。

上京後創作生活に失敗した啄木はこの歌の作られた当時、東京朝日新聞社の一校正係として働いていた。これに反して盛岡中学校時代、文学や人生を論じた多くの友人はそれぞれの目的に向かって輝かしいコースを歩んでいたのである。これら友人の活躍と栄進の噂を聞いた時に、啄木の心中には志を得ぬ者の痛切な悲しみが去来したことはいうまでもない。この一首はそうしたやるせない気持を歌ったものであるが、「花を買ひ来て妻としたしむ」という表現には自分と共に悲運の道を歩んだ妻に対する労りもこめられていると見るべきであろう。<sup>11)</sup>

岩城の解釈は啄木の伝記的境遇を踏まえた上で、当時の啄木の妻への気持を考慮したものであるといえよう。

啄木は白い百合の花が好きだったようである。啄木は「『爾妓多麻』第一号(明34・9・21)に寄せた「嗜好」の花の項に「百合ノ花」を挙げ、恋人節子をしばしば白百合にたとえ、「節子自身も啄木に当てた手紙の表紙に『百合子』としたため」た言う。<sup>12)</sup>

岩城が言うように「花」は「自分と共に悲運の道を歩んだ妻に対する労り」つまり、妻

10) 淡江大学日本語文学系編『国際啄木学会台北大会論集』、1991、p.127。

11) 『啄木歌集全歌評釈』、筑摩書房、1985、p.46。

12) 国際啄木学会編『石川啄木事典』、おうふう、2001、p.162。

節子の「労り」を慰めるものであるだろうが、「花」は啄木自分自身に与える自らの「労り」であったのかも知れない。場合によっては、「花を買ひ来」た一番の理由は花の好きだった啄木が「創作生活の失敗」「実生活の失敗」から来る挫折感を自ら慰めるためであったのかも知れない。

八年前の  
 今のわが妻の手紙の束！  
しま  
 何処に蔵ひしかと気にかかるかな。

この歌について岩城は「若き日の灼熱の恋を回顧し、そうした手紙の束もしまったまま取り出してみる余裕のない現在の生活を歌ったもの」<sup>13)</sup>と解釈している。岩城は「若き日の灼熱の恋を回顧」することのできない、生活のどん底に落ちいていた啄木に注目している。

この歌でいう「八年前」は啄木と節子が婚約した明治三十七年のことであるが、二年後の明治三十九年の渋民日記に啄木は次のように書いている。

取り出したのは、百幾十通といふ手紙の一束！あゝ、これが乃ち自分の若き血と涙との不磨の表号、我が初恋一否一生に一度の恋の生ける物語であるのだ、自分と妻せつ子との間の！

詠みもてゆくに、目に浮かぶは、あゝ、過ぎゆきし日の彩と香ひ。喜びの涙と悲しみの涙に書きわけた我等二人の生命の絵巻物!!!—中略—嘗て前後二回、死なうと思つた事のあるこの身の、今猶生きて、しかも喜びを以て生きて居るのは、たゞ御身といふ恋人のあつた為ではなかつたか。

(十二月二十六日、日記)

啄木はかつて妻節子との恋を「喜びの涙と悲しみの涙に書きわけた我等二人の生命の絵巻物」「一生に一度の恋の生ける物語」として意味付けていた。これは妻節子にとっては言うまでもなかつただろう。

数年後、啄木は「一生に一度の恋の生ける物語」の「手紙の一束」を「取り出してみる余裕のない現在の生活」を嘆いている。同じく、かつて啄木と「一生に一度の恋の生ける物語」の「手紙の一束」を交していた妻の節子の現在の気持はいかなるものであつただろうか。

それは少なくとも啄木のそれより増すものであつたのは間違いないだろう。

#### (四) 病との闘い

13) 『啄木歌集全歌評釈』、筑摩書房、1985、p.151。

病院に来て、  
妻や子をいつくむ  
まことの我にかへりけるかな。

この歌が作られる時期は明治四十四年二月頃であると思われる。啄木は同年二月一日東京帝国大学医科大学付属病院三浦内科で診察を受けて、入院を命ぜられる。同年二月四日慢性腹膜炎のため東京帝国大学医科大学付属病院青山内科に入院、三月十五日退院している。退院後も体の不調は続いた。こういった背景から詠まれた歌であろう。

この歌について岩城は次のように解釈している。

入院という思いがけない出来事を通し、家族と離れた生活を送るうちに、いつしか平素の苦悩や焦燥を超越して、「妻や子をいつくむ」本来の人間的な自己を取り戻したことをいう。平明な表現の中にしみとおる力を感じさせる一首である。<sup>14)</sup>

岩城が指摘しているように、啄木は「入院という思いがけない出来事を通し、家族と離れた生活を送るうち」に、自分の身の回りを省み、「妻や子」の大切さを感じたのかもしれない。ところが、この時啄木の病状は相当に進行して<sup>15)</sup>わずか一年の後の死を向かえていた。「若き日の灼熱の恋」を信じ、啄木と結婚した節子の心境はいかなるものであったらうか。

子を叱る、あはれ、この心よ。  
熱高き日の癖とのみ  
妻よ、思ふな。

この歌の初出が『新日本』明治四十四年七月号であることから、この歌の作られる時期は同年六月の頃であろう。啄木の病については前述したが、その頃啄木の病状はかなり「悪化」していたようである。<sup>16)</sup>しかも、生活の困窮は増す一方であった。こういった状況に陥っていた啄木が「妻」に「日頃の不遇な生活によるいらだち」や「自分の不幸だつた過去を顧みて、せめて子供にだけはもつと幸福な生涯を送らせたい」<sup>17)</sup>気持を訴えているのは自然な成り行きであったのかもしれない。

同じ頃、函館移住の家族を送るために実家に帰りたいとする妻節子の意思を啄木は無視し、トラブルを起こしていた。また、節子は翌月の七月二十八日東京帝国大学医科大学付属病院青山内科における診察によって肺尖カルタにかかっていることが判明される。

つまり、この歌には啄木自分自身の病による「いらだち」や「子供」の「幸福な生涯」を

14) 『啄木歌集全歌評釈』、筑摩書房、1985、p.157。

15) 国際啄木学会編『石川啄木事典』、おうふう、2001、p.634。

16) 上掲書15)、p.635。

17) 上掲書14)、p.161。

願う気持は歌われていても、肺結核に蝕まれている妻節子への配慮は少しも歌われていないだろう。

友も、妻も、かなしと思ふらしー  
病みても猶、  
革命のこと口に絶たねば。

この歌の初出は『新日本』明治四十四年七月号で、前歌と同じ時期に作られた歌であろう。岩城が「病気になってなお革命への志向と情熱を捨てることができず、これを口にする自分を友人や妻が不安げに見守るという意味の歌」<sup>18)</sup>であると言うように、「病気になってなお革命への志向と情熱」が歌われているだろう。また、この時期は、啄木が社会主義に傾倒しつつある頃であり、そういった思想の念を表す歌であるかも知れない。

しかし、妻節子は啄木の「病気」と「革命への志向と情熱」を「不安げに見守」っているが、啄木は妻節子の何を「不安げに見守」っていたのであろうか。

放たれし女のごとく、  
わが妻の振舞ふ日なり。  
ダリヤを見入る。

この歌について岩城は退院後の啄木の病状を踏まえた上で「妻の節子は、病気に苦しんで神経の尖った夫を慰めようと心を砕くがやはりトラブルは免れず、再度にわたって啄木から離婚一家からの追放一を申し渡されるという事態を引き起こしている。この歌もそうしたある日の夫婦の微妙な関係を歌ったもの。『放たれし』は『追放の意。』」<sup>19)</sup>と解いている。

岩城が目にしたように、啄木は退院以来体の不調は続き、しかも生活の困窮はますます一方であった。この歌はそういった時期に作られたものである。妻節子は「神経の尖った夫を慰めようと心を砕く」が、啄木は「再度にわたって」「離婚一家からの追放一を申し渡」しているのである。啄木が妻節子に離婚を申し渡している理由については明らかではない。ただ、啄木は日記に「予は予の妻が計略を以て欺かんとした事を許すことが出来なかつた。離縁を申渡した」（明治四十四年六月四日）と書いている。啄木と妻節子との間に何かの誤解が生じたのであろうか。そうではないと、知られていない何かの真実があったのであろうか。確かであるのは、こういった言説はすべて啄木側のものであると言うことである。

ともかく、啄木より「家からの追放」を意味する「離縁を申渡」された妻節子は、この時、肺結核に苦しみながら、姑との確執にも耐えなければならなかったのである。

18) 岩城之徳、前掲書、p.165。

19) 上掲書、p.169。

## 四、終りに

啄木の短歌に描かれた妻節子の意味を節子の視線で読み直してみた。妻節子は啄木や啄木の文学成立において多大な役割をはたした存在であったことは間違いない。節子は北海道漂泊の悲しみや貧困の東京暮らしの痛みをもっとも諸に受けた存在であった。しかし、妻節子は啄木の恋の短歌の主人公ではなくその恋を回想させる脇役にしか過ぎなかったのである。啄木は「痛み」のある現在の苦痛から逃れるための過去連想の対象として節子との恋を回想しているだけである。啄木の短歌における妻節子はこういった姿としてしか歌われていない。

啄木の名を日本近代文学史上に高く位置づけた歌集『一握の砂』『悲しき玩具』を見ると、妻節子を詠んだと思われる歌は数少ない。勿論、詠んだ歌の数だけで、啄木の短歌における節子の意味を論じることも無理であろう。しかし、啄木は北海道漂泊の時、函館の弥生小学校の代用教員をしていたが、その時の教師橘智恵子を詠んだ歌の方が多いのはアイロニーであろうか。しかも、その内容は恋情の念を表している。啄木の短歌にはこういった陥穽があるからこそ、妻節子の視線で読み直す必要が生じるのである。

## 【参考文献】

- 『石川啄木全集』、筑摩書房、昭和61年。  
今井泰子『石川啄木論』、塙書房、1974。  
岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』、筑摩書房、1985。  
岩城之徳『石川啄木伝』筑摩書房、1985。  
岩城之徳編『別冊国文学NO.11 石川啄木必携』、学灯社、1981。  
注釈今井泰子『日本近代文学大系23 石川啄木集』、角川書店、昭和44。  
淡江大学日本語文学系編『国際啄木学会台北大会論集』、1991。  
国際啄木学会編『石川啄木事典』、おうふう、2001。

## 要 旨

啄木や啄木の作品を論じた先行論を見ると、啄木の家族は啄木や啄木の文学を支える存在として働いている。啄木の立場を陽のイメージにする役割のようである。

しかし、啄木や彼の作品を見ると、啄木の家族は啄木や啄木の文学のために犠牲を強いられる存在であったのかも知れない。とりわけ、妻節子はそうであったといえよう。こういった家族の支えに対する認識は啄木や啄木の作品にあまり入っていないように思われる。本稿では、犠牲を強いられる存在としての家族、特に妻節子の視線で啄木の短歌を読み直してみた。

妻節子は啄木や啄木の文学成立において多大な役割をはたした存在であったことは間違いない。節子は北海道漂泊の悲しみや貧困の東京暮らしの痛みをもっとも諸に受けた存在であった。しかし、節子は啄木の恋の短歌の主人公ではなくその恋を回想させる脇役にしか過ぎなかったのである。啄木は「痛み」のある現在の苦痛から逃れるための過去連想の対象として節子との恋を回想しているだけである。啄木の短歌における妻節子はこういった姿としてしか歌われていない。

啄木の名を日本近代文学史に高く位置づけた歌集『一握の砂』『悲しき玩具』を見ると、妻節子を詠んだと思われる歌は数少ない。勿論、詠んだ歌の数だけで、啄木の短歌における節子の意味を論じること無理であろう。しかし、啄木は北海道漂泊の時、小学校の代用教員をしていたが、その時の教師橋智恵子を詠んだ歌の方が多いたのはアイロニーであろうか。しかも、その内容は恋情の念を表している。啄木の短歌にはこういった陥穽があるからこそ、妻節子の視線で読み直す必要が生じるのである。

キーワード：家族、家庭、短歌、一握の砂、悲しき玩具、堀合節子、岩城之徳

투 고 : 2009. 11. 30

1차 심사 : 2009. 12. 12

2차 심사 : 2010. 01. 09